

(19)



JAPANESE PATENT OFFICE

PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11) Publication number: **03034772 A**

(43) Date of publication of application: **14 . 02 . 91**

(51) Int. Cl

H04N 1/40
G06F 15/68

(21) Application number: **01169423**

(71) Applicant: **CANON INC**

(22) Date of filing: **30 . 06 . 89**

(72) Inventor: **MITA YOSHINOBU**

(54) **PICTURE PROCESSING UNIT**

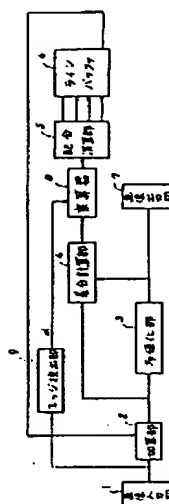
as the edge quantity is large.

(57) Abstract:

COPYRIGHT: (C)1991,JPO&Japio

PURPOSE: To prevent production of pseudo contour and generation of unique stripe pattern generated when a picture is processed by the error spread method by using a threshold level fluctuated periodically as a threshold level when an input picture data is quantized and controlling the quantity of an error to be corrected in response to the characteristic of the picture.

CONSTITUTION: A spread error from a line buffer 6 is added to an input picture data inputted from a picture input section 1 at an adder section 2. Then a multi-value processing section 3 applies multi-value processing. The multi-value processing section 3 applies the multi-value processing by using 3 threshold levels simultaneously. When the absolute value of the difference of the threshold level of the 3 combinations is selected small, the result of the n-value processing is close to the case of binarizing process and when the absolute value is selected large, the effect of the n-value processing is increased. A multiplier section 8 multiplies an error sent from a difference calculation section 4 with a coefficient a sent from an edge detection section 9. Thus, the spread error is increased



⑩ 日本国特許庁(JP)

⑪ 特許出願公開

⑫ 公開特許公報(A)

平3-34772

⑬ Int. Cl.⁵

H 04 N 1/40
G 06 F 15/68

識別記号

B
3 2 0 A

庁内整理番号

6957-5C
8419-5B

⑭ 公開 平成3年(1991)2月14日

審査請求 未請求 請求項の数 3 (全7頁)

⑮ 発明の名称 画像処理装置

⑯ 特 願 平1-169423

⑰ 出 願 平1(1989)6月30日

⑱ 発 明 者 三 田 良 信 東京都大田区下丸子3丁目30番2号 キヤノン株式会社内
⑲ 出 願 人 キヤノン株式会社 東京都大田区下丸子3丁目30番2号
⑳ 代 理 人 弁理士 丸 島 儀 一 外1名

明 細 書

1. 発明の名称

画像処理装置

2. 特許請求の範囲

(1) 入力画像データを2値又は多値の画像データに量子化する量子化手段と、

前記入力画像データと量子化後の出力画像データの誤差を補正する補正手段とを有し、

前記量子化手段は入力画像データを量子化する際の閾値として周期的に変動する閾値を用い、前記補正手段は画像の特徴に応じて補正する誤差の量を制御することを特徴とする画像処理装置。

(2) 更に、前記入力画像データから画像のエッジ量を検出するエッジ検出手段を有し、

前記補正手段は前記エッジ検出手段からのエッジ量に応じて誤差の量を制御することを特徴とする特許請求の範囲第(1)項に記載の画像処理装置。

(3) 前記補正手段はエッジ量が多いほど誤差

の量を多くすることを特徴とする特許請求の範囲第(1)項記載の画像処理装置。

3. 発明の詳細な説明

(産業上の利用分野)

本発明は画像データを2値又は多値の画像データに量子化処理する画像処理装置に関するものであり、特に誤差拡散法等入力画像データと出力画像データとの誤差を補正しながら量子化を行なう減度保存型の量子化方法を用いた画像処理装置。

(従来の技術)

従来より減度保存型の量子化方法としては、誤差拡散法、平均誤差最小法等が知られている。第8図(a)、(b)に誤差拡散法により入力画像データを多値化処理する際のブロック図を示す。多値化(n値化)部にはn-1個の閾値が用いられる構成となっており、これらの閾値 t_1, \dots, t_{n-1} と画像データとの大小を比較して画像のn値化処理を行なう。そしてn値化処理の際発生する誤差(入力画像データとn値化処理後の出力画像データとの差)は、誤差計算部において計算

され、周囲のまだ2値化が行なわれていない複数又は単一の画素に加算され、入力画像と出力画像の濃度の保存が行なわれる。この種の量子化方法によれば、文字等の線画及び写真等の中間調画像いずれの画像も良好に再現できるといった長所がある。

(発明が解決しようとしている課題)

しかしながら、上述の従来例では、 n 値化のために $n-1$ 個の閾値 $t_1 \sim t_{n-1}$ と画像データを比較している。この閾値 $t_1 \sim t_{n-1}$ までが互いに接近した値を持っているために、 n 値化の結果と原画素の画像データ値との誤差が微小になり誤差が微小になると周囲の画素への誤差拡散が充分に行なわれないことになる。このため誤差拡散法による多値化ではなく、単なる多値化と非常に近い結果となってしまう。

このために、原画像がグラデーション(濃度勾配)を持つ中間調画像の場合は、多値化を行なった際の境界がはっきりしてしまい疑似輪郭が発生して画質が劣化し、時には誤差拡散法による2値

化より悪い画質になってしまう欠点があった。

さらに疑似輪郭の発生原因としては n 値化の結果をプリンタ等に出力する際にも考えられる。例えばインクジェットプリンタで濃度により濃いインク、薄いインクというように出力するインクの切り換える時に、大きな濃度差が発生する。このためにインクの切り換えに相当する濃度付近で疑似輪郭が発生する。第6図(a)は誤差拡散法により n 値化を行なった際の処理結果の一例を示すものであり、誤差の拡散量が少ないため、はっきりとした境界が現われてしまい、しかも出力“1”と“2”で使用する濃淡インクが異なる場合には、さらにはっきりとした疑似輪郭が発生するといった欠点があった。

又、誤差拡散法により画像データを2値又は多値データに変換し、画像を再生した場合、再生画像に独特な縞模様が発生し、この縞パターンより画質が劣化するといった欠点があった。

本発明は上述した従来技術の欠点を除去することを目的とし、疑似輪郭の発生及び誤差拡散法で

処理した際発生する独特な縞模様の発生を防止できるとともに、解像度及び階調性共に優れた画像を再現することができる画像処理装置を提供するものである。

(課題を解決するための手段及び作用)

本発明によれば、入力画像データを2値又は多値の画像データに量子化する量子化手段と、前記入力画像データと量子化後の出力画像データの誤差を補正する補正手段とを設け、前記量子化手段は入力画像データを量子化する際の閾値として周期的に変動する閾値を用い、前記補正手段は画像の特徴に応じて補正する誤差の量を制御するようにしたものである。

つまり、量子化の際の閾値を変化させることにより、出力値をばらつかせることができ疑似輪郭の発生を防止できる。又、閾値が周期的に変動するため、網点配列を形成することができ、これにより独特な縞模様の発生を抑えた中間調画像を得ることができる。

(実施例)

以下、図面を参照し、本発明の一実施例を詳細に説明する。尚、本実施例では入力画像データを多値データに量子化処理する例を説明する。

第1図は本発明の一実施例を示したブロック図である。

1は原稿画像を読み取り8ビット(0~255)に量子化されたデジタル画像データを出力する画像入力部である。又、画像入力部はコンピュータからの画像を入力する構成であってもよい。画像入力部1によって入力された入力画像データには加算部2でラインバッファ6からの拡散誤差が加算される。この拡散誤差は、現在入力している入力画像データ以前の画素に対し、多値化処理を行なった際に発生した誤差である。次に多値化部3において多値化が行なわれる。その結果が最終出力としてレーザービームプリンタ、インクジェットプリンタやモニタ等によって構成される画像出力部7に出力される。また、この出力は差分計算部4に送られる。差分計算部4では多値化前の入力画像データと多値化後の出力画像データとの差

を計算する。この計算結果が多値化の際の誤差となる。この誤差は乗算器8に入力される。

乗算器8では差分計算部4から送られてきた誤差にエッジ検出部9から送られてきた係数 α ($0 \leq \alpha \leq 1$)を掛け合わせる。

エッジ検出部9は公知のコンボリューション演算によりエッジ量を検出し、係数 α を出力する。

エッジ検出部9ではエッジ量が多いほど、 α の値を大きくして出力する。

これにより、エッジ量が多いほど拡散する誤差を大きくすることができ、誤差拡散法の長所であるエッジ部の再現性が良いことを利用することができる。

又、エッジ量が小さい場合は拡散する誤差を小さくすることにより、ディザ処理の長所である階調の再現性が良いことを利用できる。

乗算器8で係数 α が乗せられた誤差は配分演算部5において、現在処理している画素の周辺画素に振り分けるデータとして分割される。

尚、配分演算部5では現在処理している画素に

を行ない、画素データが閾値よりも大きい時は1を又小さい時は0をエンコーダ12へ出力する。エンコーダ12では、比較器11-1~11-($n-1$)の比較結果に基づき閾値を超えた比較器がいくつあるか、つまり比較器から出力された1の値がいくつあるかに基づき多値化の出力を決定する。

閾値ROM10-1~10-($n-1$)に格納されている閾値データが注目画素(処理中の画素データ)の位置に応じて定まった値を出力する様になっている。このため水平カウンタ13に入力される画素クロックと垂直カウンタ14に入力される水平同期信号(HSYNC)の値に応じて画素位置を決定し、この水平カウンタ7及び垂直カウンタ8からの出力が閾値ROM10-1~10-($n-1$)にアドレスデータとして供給される。

第3図に $n=4$ 即ち、4値化処理する場合の閾値ROMの内容の一例を示すものである。閾値ROM10-1には(a)の閾値が、閾値ROM

近い画素により多くの誤差が分配される様重み付けが行なわれている。適当な分割の配分比で分けられた拡散誤差データはラインバッファ6の周辺画素に相当する適当な位置に加算される。

最終的に、注目画素に割り当てられる誤差はこのラインバッファ6において加算され、多値化処理する段階で、加算部2によって誤差の加算が行なわれる。誤差は当然負の場合もある。

尚、誤差は入力画素データよりも出力画素データが小さい時は正のデータであり、逆に入力画素データよりも出力画素データが大きい時は負のデータとなる。

次に多値化部3について詳細に説明する。第2図は多値化部の詳細な構成の一実施例を示す図であり、多値化(n 値化)のために11-1~11-($n-1$)まで $n-1$ 個の比較器が用意されている。

比較器11-1~11-($n-1$)では、それぞれ入力画素データと閾値を格納した閾値ROM10-1~10-($n-1$)からの閾値との比較

10-2には(b)の閾値が、閾値ROM10-3には(c)の閾値が格納されている。それぞれの閾値マトリクスは、この実施例では 4×4 のマトリクスとした。従って水平カウンタ13と垂直カウンタ14は画素位置を指定するために下位2bitが閾値ROMに供給される。このようにして多値化部3では第3図の閾値マトリクス(a)、(b)、(c)を同時に3つ用い多値化を行なう。この閾値ROMにより3つの閾値の組合わせが例えば(14, 24, 34)の場合には、閾値が小さいので多値化結果(2値化の場合でも)“255”(8bit)となりやすく逆に(224, 234, 244)の組合わせでは“0”になりやすい。つまりこの3つの組合わせの各閾値の差の絶対値を小さくとれば n 値化の結果が2値化の場合と近い状態となり、大きくとれば n 値化の効果も大きくなる。

又、(14, 24, 34)の閾値を用いた画素では34を超えるデータは全て“255”(8bit)で出力されるため、誤差の拡散量が大き

くなる可能性が高い。

同様に(224, 234, 244)の閾値を用いた場合、224未満のデータは“0”と出力されるため誤差の拡散量が大きくなる。

この様に、閾値を濃度の高い方または低い方にかたよらせることで単純な3つの閾値例えば(60, 120, 180)を用いて誤差拡散法を行なう場合よりも誤差の拡散量を大きくすることができる。

つまり、本実施例によれば、誤差を補正しない単純な $n(4)$ 値化処理になることを防止することができる。これにより n 値化処理後レベルがはっきりと変化し境界ができることを防止でき、疑似輪郭の発生を防止することができる。(第8図(b))

誤差拡散法の出力はディザ法の出力に比べた場合に文字や画像中のエッジの保存性が良く、最近では文書等を出力するひん度の高いプリンタ等良く使われている(例えばファクシミリ)。

しかしながら、ドットが整列せず、誤差拡散法

の間の性質の領域の検出をエッジ検出器で行なえば、自動的に画像処理が行なえる。この方法によれば早に従来のディザ出力と従来の誤差拡散出力を領域によって切替えたものに比べるとエッジ検出精度が低くても、エッジ部と中間調部のつなぎ目の劣化や不自然さを全く感じさせない出力結果を得る事が可能になる。

この乗算係数 α を決定する一例を第4図に示すエッジの検出割合により t_1, t_2 の間で α を変化させ、エッジ検出値 $< t_1$ の時に $\alpha = 0$ 、エッジ検出値 $> t_2$ の時 $\alpha = 1$ としたものである。

前述の実施例では入力画像データを誤差拡散法により多値化(n 値化)する例を説明したが、2値化でも全く同様に適応できる事は言うまでもない。

又、 α の制御をエッジの検出により行なうのではなく、他の領域指定手段により制御しても良い。

又、画像の全画面にわたり $\alpha = \text{const.}$

特有の縞模様が発生したり、プリンタの周波数特性(振動等の原因による)の影響を受けまい。

一方ディザ法は文字や画像のエッジ部の解像度をさげるという欠点があるが、ドットの安定性により忠実な階調再現が可能である。

従って、この2種類出力処理方式の長所のみをとれば理想的なプリンタを得る事が可能である。即ち、エッジ部では誤差拡散法により出力し、中間調部ではディザ法により出力する。

本実施例では乗算器8に入力する α を0とすれば誤差が全く拡散されずに単なる n 値ディザ法と同じ出力が得られ、 $\alpha = 1$ とすれば疑似輪郭の発生を防止した多値、又は2値の誤差拡散処理結果となる。つまりエッジ部では $\alpha = 1$ 付近とし、中間調部では $\alpha = 0$ 付近とすれば良い。又中間調とエッジ部の中間領域では α を0から1に、スムーズに切替えてやれば出力結果の内ディザ処理に近い出力と誤差拡散に近い処理がスムーズに切替える事が可能である。

このエッジ領域、中間調領域、エッジと中間調

として、自由に操作者が操作して画像をディザ画像にしたり($\alpha = 0$)、誤差拡散画像($\alpha = 1, 0$)その中間的な画像にしたり、好みに応じて設定できるようにしても良い。

又、本実施例の入力画像データをR, G, B 3つとすることにより本発明はカラー画像にも適用することができる。

以上のように本発明によれば誤差拡散法により量子化を行なうにあたり、閾値を周期的に変動させることにより疑似輪郭の発生及び独特な縞模様の発生を防止することが可能となる。しかも、画像の特徴に応じて誤差の拡散量を制御することにより、階調性及び解像共に優れた画像を再現することができる。

4. 図面の簡単な説明

第1図は本発明の実施例を示したブロック図、第2図は多値化部の詳細を示したブロック図、第3図は閾値マトリクスを示した図、

第4図はエッジ検出量に対する係数 α の値を示した図、

第5図(a)、第5図(b)は一般的な誤差拡散法による多値化処理を示した図。

第6図は従来の多値化処理結果と本実施例における多値化処理結果を示した図である。

図中1は画像入力部、2は加算部、3は多値化部、4は差分計算部、5は配分演算部、6はラインバッファ、7は画像出力部、8は乗算器、9はエッジ検出部、10-1~10-(n-1)は閾値ROM、11-1~11-(n-1)は比較器、12はエンコーダ、13は水平カウンタ、14は垂直カウンタである。

182	126	70	196
112	14	28	154
168	42	56	98
224	84	140	210

(a)

192	136	80	206
122	24	38	164
178	52	66	108
234	94	150	220

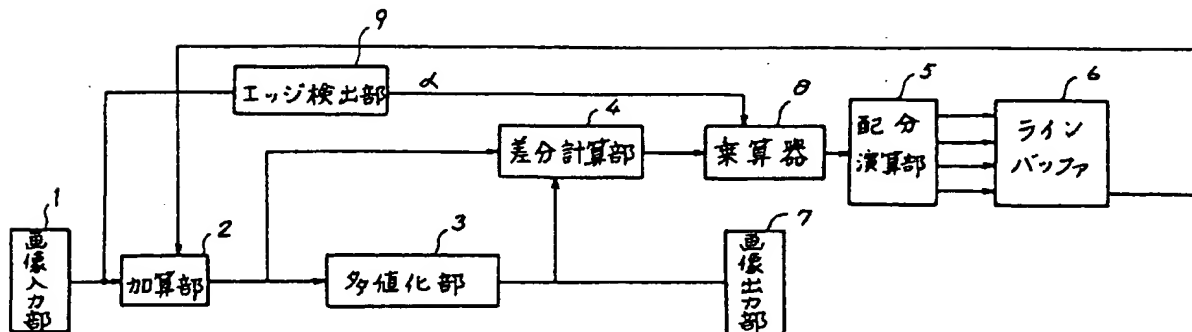
(b)

202	146	100	216
132	34	48	174
188	62	76	118
244	104	160	230

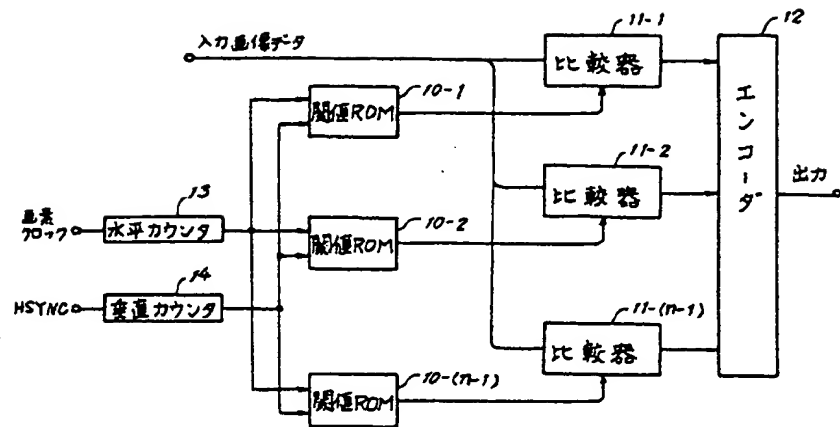
(c)

出願人 キヤノン株式会社
代理人 丸 島 儀 一
西 山 恵 三

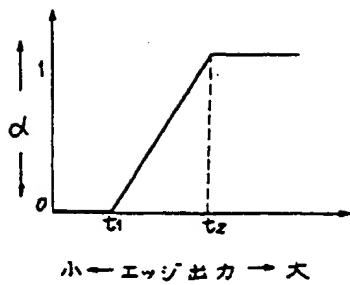
第 3 図



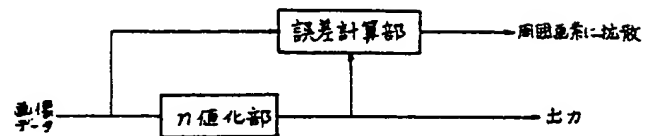
第 1 図



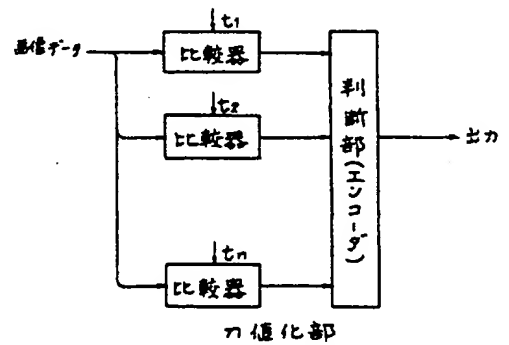
第 2 図



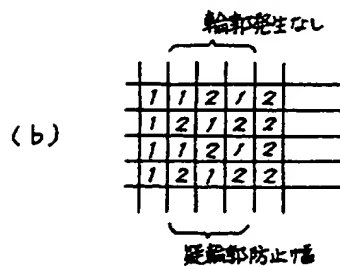
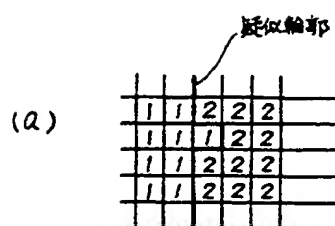
第 4 図



第 5 図 (a)



第 5 図 (b)



第 6 図